

鳥取市周辺の農業地域構造

— 福部村を事例として —

山 本 倫 子

この論文は、鳥取市周辺の大地域とその中の一単位地域、福部村をとり上げ、自然的側面と経済的側面の二面から農業地域を区分し、さらにそれを構造化しようとしたものである。地形や気候等自然的側面では農作物を、経済的側面では主として兼業を指標とし、あくまでも農業の面からの視点を重視した。

鳥取市周辺の大地域では、農作物による、砂丘の畑作・米作・果樹作・山間の畑作米作の四つの帯状構造と、兼業による鳥取市を中心とする兼業・専業・兼業の三つの圏構造が模式的に認められる。この二つを組み合わせる総合的な農業地域区分とした。福部村はこの中で、砂丘の商業的畑作と果樹作を中心とした専業的農業地帯として、最も先進的な農業地域となっている。

次に、福部村の中を、さらに細かく、農業集落を単位として大地域と同様に地域区分してみた。こうして細分した結果、一つの谷底平野を中心とする地形的な類似性の為か、農作物の面では基本的な帯状構造が見られ、大地域との類似性が強く、ミニチュア的な意義をもつ事が認められた。兼業の面では、中心都市をもたない周辺部である為、圏構造は見られないが、周辺兼業地帯と専業地帯の境界部分と見られ、大地域の中での福部村の位置を明確に再確認した。

次に、資本主義社会の中での農業の発達を商業化の進展と認識し、これによって、農業地域を相互に関連づけ、構造化しようとした。福部村の農家アンケートを資料に、農業集落毎に農家経営を米作の比重によって類型化し、発達構造の中に位置づけて、地域区分を地域構造にまで高めたいと思ったのである。資料が福部村のものしかないので、大地域の構造分析はできないが、農業地域がほぼ同じ事から、福部村での結果を演繹することができると思われる。福部村では、同一集落の10年前の県の調査と比べると、標準的な農家経営で、米の比重が落ち、他の商品作物に重点が移っている例や、一般的に農業収入の高い先進農業集落程、米の比重が低く、他の商品作物の割合が高いのが見られる。これは、米作の上に他の商品作物を導入して、しだいにそちらに重心が移る形で商業化が進んできた事を示している。これを基礎に、実際の作物による発達構造の模式化を集落と農業地域で行った。その内部を細かく見れば、商品作物の導入の型には、複合型・単一型など

あり、又その商品作物の種類も様々であるが、現在、発達段階により三つの地域に大別される。その地域を見ると、1970年の国勢調査の時点より、米作地域が縮小し、全般的に商業化の進展が著しい。農業の商業化が活発に進展している現在、農業地域構造も刻一刻と流動してやまぬものであることを再認識したのである。

厚木市の工業化と地域の変貌

米 山 和 子

本論文は、神奈川県の新興都市厚木市を調査地域とし、同市に本格的な工場進出が始まった昭和35年以降を考察の対象とした。テーマは厚木市の工業化の過程と工業の内容、それに地域の変貌の実態である。

厚木市の工業の主力は、京浜工業地帯の過密化によって移転してきた進出工場である。昭和30年代、日本経済の高度成長期に、京浜にあった大企業は工場拡張の必要に迫られた。しかしすでに本社工場を拡張する空間的余裕を持たなかったり、条例によって新設拡張を制限された各社は、東京の近くに進出することを有利としていた。当時厚木市は市制を施行したばかりの新生都市で、まだ純農業地帯であった。それで厚木市では昭和35年市を発展させるために工場の誘致条例を制定し、誘致活動に力を入れることになった。折しも東名高速道路の建設が決定し、そのインターチェンジが厚木市内に造られることになり、進出場所を捜していた各工場の目は厚木市に集中する結果となった。

厚木市は内陸に位置し、鉄道は小田急線が南の方を一本通っているだけで、物資の運搬はほとんどトラックにたよっている。したがって、当地に進出した工場は運搬の楽な軽工業や、電気機械部品の組立て工場が主である。また、台地上の広く平な土地が比較的安く手にはいったため、規模の大きい工場も進出してきている。工業用地は農地を転用し、工業用水は多く深井戸にたよっている。今一番の問題は現業部門の労働力不足である。組立て工場は多くの人手を必要としているが現業部門の仕事は当地域内の若い人から嫌われているため、各社とも地方へその労働力を求めている。地方出身者は寮に入る人が多いので、厚木市内の大工場では従業者中の入寮者の割合が特に多いようである。